新撰菟玖波集

雜五　聯句
神祇　釋敎
發句上下　作者部類

へ5
1130
5上

新撰菟玖波集巻第十七

雑連歌五

源政元子句乃連歌志侍し中に

おりふしもうかし人にはりすゑ

[illegible]綿へ所もろ

うける世をきまのふねに雲にかゝりてそ

久かゝれはすまの浦しほのけふりから

智蘊法師

ひとの世はさて夢なりけり

[stamp] 利 1130 5止

おもひきる事なとしのりかなしめて

法眼専順

ちとせとも憂とおもふよの中

いつときくらすもふしけるおと流りて

法眼泰穏

うき世の夢ハいつの法はなをなし

こゝ流あはれてちかへりける

道空法師

うらし波のこの世の夢乃是屋とて

みつをやむと濁こて流ともせん

権大僧都心敬

我ひとりすめる心もと残き世す

こゝ流なをもわかりてなまへるきの書

藤原正種

みつやいまこゝ流むとおもよの中

ふねをかよふねか見のこりいそ

源実澄

津をあけやよ我ゆくれ小もとるか秋湾

わかゝらきこハうら済さやらは

宗祇法師

ひとはみから花てふ里とわかなれ
かまめふかるひとそしらまし
見るまゝにれもちかも

なかれハ花見れはうきよれは捨てそ
みもハさよふしら花のうへ

亦孝法師

うきてすむ身ハ志のあひれあられ能

なまひのこきはいかしくてるれ

慈搭法師

よの中ハ人ふも身もゆりゝきて
うきふはあ魚とて身をまるハなし

権大僧都日与

人ゝ世ふいくたひこゝろ志ほむらん
みえかれゆくなかそらの雲

宗初法師

はゝあふの世やきてなふをこの海かし

なかまよりやたくかなあらん

権大僧都心敬

こゝは世にはなるゝこゝろよ人にわか

かりそめと人そこゝろあさき哉

宗祇法師

はてしなき世の中にもかれはくらん

なをこりのおもりにかせいはなららん

藤原灌道

山家住は人をも世をもとうらみまし

うきの屋かりそことうき世なれ

宗長法師

すみなれし世にこゝろはとゝめつゝから

こゝのつかおも小城とふよと車

法眼専順

世をすてこゝろひてめくはあられし

山かけそこゝゆきまかせ月寒てし

法印行助

おもひかね世いくそすみたん

われはかり物思ふとやはおもふらん
この秋かな

いつみよりちかうき世と思ひしに
たらちねはいはぬ我身をなかしかな
宗祇法師
天神の御返し

はなひてやこの世をいとふいのちかな
ともなむけてあらくぬるみち
権大納言隆実

うし後見も知との世の中はたゝあや
はこゝまてわか身ゆくへしらすきえて
後花園院御製

わか法もなかしあしき世の中
身を思ふはにしかもいつとなかす
御製

光ふもかくれもなきはよの中
人いなてしもなくかすならめとも
ひまれあひあるすゑよの中
文明十八年二月盡日百韻之連歌ニ

思へさて清き都て座をこめおかひ
三品親王

かゝみちあらはれそよ秋はわかて清き
うつかへしなき志のふいふしへ
慈照院入道前太政大臣

たまれそのかくれたるにふなるらへて
すてしあつきさへ杖をくるしき
後土御門院御製

月は猶ともしき世をすてゝすみぬらん

老波の身にそやくちにけ衣
左衛督あきもろ

おもひくせてよしやうき世
むまれきてわかなるこれに
多々良政弘朝臣 [red: 弘]

なれ来しはいつのか世を
とふかへ人をもなしひとて
道空法師

わか心をいとふ清き世の中

いつくとてさして我宿とかきもなし

宗祇法師

まよふにもくみ道は大かたひろき世を
思ひしきはてつねにとそもうし

宗砌法師

身もいはれ世うかへれひと
かしやまもなふきまれぬ

権大僧都心敬

されは世をみ道はなつることはなかし

うきもむかしひとたにひあらしを

前大納言教秀

されともひとつの縁はかりして
おやうまれのいのちをはし秋

入道釈正永

みちもなきあはれにもさて人やまつはらん
わくましてのみちもすきまゝり

多々良政弘朝臣

はかなき世をふゝきて草すらちまよひて

おもふとはみぬひとのとふらひ

宗砌法師

王にかよふ乃ちは世をあはれ物と

わかまちかなるわすれしのみち

よみ人志らす

浮世の身をもわすれとおもふらん

多みや浦よりんひとりけみち

日晟法師

志る人世のちれ世をそ乃梅比月

なき乃ち後りのうらめしは身や

法橋兼載

うき世にも山にもはらぬすみは袖

つゆひはくしあはれ世を志てぬ身はうきに

前大納言教秀

うき後はちれは風まつひなし

行くれくとおもふくはしきを

十輪院入道前内大臣

あらましは山としらぬ身はなりて

夢ゆへしらぬ身ハあはれなり

式部卿は致為

行すゑのあらましことになりはてゝ
いかなるやまのおく住しはめん

前左大臣

あらましハ河の流のとふかなきまて
水比たにたえすなかくて人もかし

御製

いさ深きあまの身をうくささなや

我もてとるかなあかぬ世ハ絶

入道親王尊永

よひ人ハ身をかくすたに風流しくて
すてゝもいとみハ老ぬまゝ

妙花寺前関白左大臣

かくれ家をたゝひかへぬ年しくよ
うきへ深雲ハひとはみちつも

式部卿邦高親王

橋まよみをうくおもふとさしあまし

後乃世をおもふみちこそうれしけれ猶

従三位冨子

さらでこそあれ身をハなけきし

憂世のちかはなかふとしらん

法印公意

すてたる法こそ此世にかくそいとはまし

うきよりハたゝわかみをつまに

宗長法師

いとふ芳野のおくの人は世をうき

いく程の身とはいかゝおもふらん

古白法師

むかしをいとへ老のよの中

やすらふな猶世をくらしつゝ

法印妙桂

業人いとへらふるこれ絶して

月やゝ雲たえなかくし風とこそ

法印心敬

いとふものとはおもへよの中

くるしき世をしやうちか無るらん

宗祇法師

風ならてちるを浮世とそみよ
これはやまのはおくにすむらん

法眼專順

身をすつるこそ後をふところすや
いかなる世にかありけりすゑ

宗砌法師

うき身をもわすれはすてそまた忘れし

朝夕にさてあなたなるうき世なれ

智蘊法師

身をすてし日たにとゝまらぬかれし
おもひしはしもさていかにせん

法橋兼載

はてはやれ身にうちおはれよし
きてしぬるは法の道なり火

蔭涼院入道贈太政大臣 内 ミミ

うき世をはうらしきにをそねみなといて

経たるゝあめしもさゝぬよの中に
御製
この身をもみつれわすれすてはいや
とふ紙まほしきをなをつらき身よ
後三條入道前左大臣
我こゝろ猶なかりし世をすてゝ
いりそめにかへるとうらむ峯の庵
多々良政弘朝臣
すてはうき世とみやしのふらん
ちりのよきのよはゝさまたかしからう
法印泰温
なかなかにさへおこりさまぬ世をいとひて
うき世はふれしもたれもうけれひと
宗長法師
いはゝとてなれたるもせかたの身かり
あやふくなまやへそこひしき
慶祐法師
さはくれはたゝさゆめてすはたるみよ

なりはまちハ滝となりにけるかなや

法眼当順

うき世をばいとふとならばやまこえし
おりしハやはれけるすみよしの
この緒ふもわすれぬあよ細にて
内裏まてはし和漢をえらむ世中に
な残とはましれたくの山け

権中納言匡世

あらましも人ハさかひし世を出く

われはたゞあすさへなしいのちにて

権大納言宣滋

すつまじともなかあらそはれよもひて
やまわ家に緒しあさんとも老ん

宗祀法師

いはゞかくちハくちなは緒とそ思ゆく
つ極らちならふすこゝろの袖

前右大臣

ほそし世にかゝわる月ハ見るもなし

ことをとひこぬかくれみの月　山

後崇光院御製

すそしらはけふのみ山をわけしても
見るやこの秋月そおもひけりしる

前大僧正道興

よそなる身に梅を浦はなるとも
またあけはをたち小夜ふる山ほおく

権大納言実香

いつしかとかせよ見よの中

ゆきはいのちとおもふほかすなき

宗砌法師

すみなれる身をわかれのこすてゝて
山にもあれとも身をそむかしき

紀光信

ゆくる身になつのこゝろかれおもふる
おくふ山すそをいくれなりける

宗孝法師

よそなる身は中くのはかなかれても

かくれかはすみそめし花折て

権大僧都心敬

うしとみし人なきあともすてかたく

すむへきひとはまれの山里よ

源実澄

折てまつおもへくわすられあらし秋

ありまもはなぬはなのこ

如法寺院前関白太政大臣

こゝろしれぬひのこさね移はめして

いたけなりしこ縁いつまて

式部卿邦高親王

あかしへを志のへいちるよ月日まて

こゝろよりひきそを思へはかなるうまて

大政大臣

むかしは夢をなかしのつらん

文明十四年九月十二日内裏にて百韻の

連歌に　ゆきもちをきもんやあやめん

肖柏法師

むしさへいふせへまれになりはてゝ
かたらふひとりかたらふよまて
源招法師

わかむし志らぬハ友としもなくて
いまゝてはさはなくこそなかりけれ
源政宣

我むしゝ人はいかしへしは秋に
風とすもかれし草葉もかれたち
法橋堯祢

おもひけれ人ハむかしになりもせて
わかこゝろ緒さへかゝりきにけり
一覚法師

浮雲もむかしに猶ハ恋しまに
おもひいてあは世ともおもひけ
清超法師

志れりしよそまてもうらしわせしは

聯句連歌

後花園院位におはしましける時内裏にて侍し和漢連句の中に

吟詩欲満嚢

妙花寺関白左大臣

花ハこれしたはれぬみむけのぬさなるや

幾程驢既羸

権大納言実澄

ゆふまし花ハなゝみの山こえて

消陌雪如埃

御製

ちる花ハ人もゆきゝもきえて

風露濕衣裳

関白右大臣

ちるをふみしまてや袖も白からん

院寂好園暮

前左大臣実

おのゝえのくちるたうりもなかきこひよ

心事乾如麻

前左大臣

みなも河川瀬すゝしくかく波よ

山房避暑塵

中原師冨

き川かなるこゝろハみつを友として

泉聲窓又雨

宗祇法師

雲ハ形なとすゝ陰山陰く

一 燈殘孤客床

法橋兼義

よもすから寝ぬるはしとゝいひけん

前関白 千載集 和漢兼作集

哀猿斷幾腸

藤原嗣（實）宗

あかつきこそ涙をそふる猿の月

襯檐松影晴

三品親王

風さえて投てなかまくるさよの月

鶴孤閑在院

前中納言縁光

うけふむ月の志もれるみち

（擣）拭碪曉斷腸

前関白 千載

さゆさけ月の風ま里梅に世み

敲霜報楚砧（碪）

左衛門督あさむ

うくひすの草の戸ほそく梅かけて
山深暮笛跡

後花園院御製

雲うつむこすゑのはなのみちたえて
金烏射花巓

御製

よこ雲やあくるはひらまはるらん
林深觸夜鳥
ありのけすくろきこゆやあけぬらん

逐年情易傷

深草左大臣

なつかしやなれしもふりし年の月
梅報石鈴驛

従三位義繁

よなりやまもとなの香をする
雞唱向殘更

前右大臣実

幾の戸をあけのいろくなかさらく

一憂与康為隣

十輪院入道前内大臣

はるしとも雉は春の草はふらん

筆遺傳野耕

前大納言雅親

うれしきまさきまる夢はかなとのと

去与猿程移

三品親王

花の香をいくとせいりしかりはふらん

莫嘆沈者浮

権中納言宣親

わかみつにけりむかしはちそわれて

苔令石碑摩

御製

のこる名はそれさへたえいかなるらん

草埋顔巷遥 達

後花園院御製

あめのとさをまはるひとは世に経ひて

文明十三年四月内裏にて修し和
漢連句の中に
常学臥陶瀬
肖柏法師
わか身ならぬ世をいかにへらん

新撰菟玖波集巻第十八
神祇連歌
神の社にたてる松枝といふ句に
多々良政弘朝臣
新枝も見えあはいのるしるしにて
むかしとみるらんまつをかへりし
前関白　冬良
春日山たかねの雲ハ神さひて
小野の宮こそなりたまひける石

菊綴連歌に
いはれ多とかやこいてゝ久ん
御製
このはれかて小野ゝ宿ねして
あ見もろとけなこれあきはしは
藤原基教朝臣
なまつはちるひれしその底せす
うきこゝの乃ろゝなふゝおもりん
説郭友証

よ露ろくいの帰をかくはらけはへし
われもはれ日ゟねての中みち
法眼玄順
ゆふそころゝすゝま津をれをはれひ
わさはちゝゝと見せんて絶しれ
宗祇法師
思ひよるけもくもれぬ月いてゝ
秋ゝひみちは津ゝあふく民もと
權大納言教具

神わさとこよひの梅涼月そらて
袖ふりすりて白ふゆふしろ
宗伊法師

たかこ山神のはまゆふ宮ゐして
清ゆきこゝろふかくあふらぬ神しれ
宗砌法師

山路ちかみまハまんとを志つの濱
みゆきいく世を志賀のはる見
覚澄法親王

いく代や松かえも神のあらはれて
ちきりこゑく神そひとしき
法橋兼載

あらこきれの松に波はらふ風くさやま
まは経れの山そうことをはたれ
宗砌法師

志ろさ之乃くこゝろの月や此ゆふすゝき
雪うちなひくさけ乃一むら
藤原桂久

志くれゆくやますゝかはいかに伊勢
まつ神こそはなほましへん

道興法師

めくみをもかけし志るしの松のうへ
かこひし志はらあやの浦広志あて

肖柏法師

神の居し跡のみすむや浦まもる
舞姫のゆる志るしの姫るみち

宗砌法師

志つかなる神のみやひも河ちかく
あらすあさきふかみそこゝろ

権大納言実隆

袖の上にたゝ清くこゝろのうちそて
いのるも志るしを志れ絶さん

宗砌法師

うこく世の波まつかひてわまもひの神
まもる舞人の浦風もことのは
その国のつかさや神は浦とらん

一 たらかくるをもいはねましわかま

僧正公助

神は和光地の塵に世にあらはれて

さくなるとこそ後もみよ

多々良政弘[弘]朝臣

あらかしく志ねはかゝれはうちそて

けふつくるかた見えなりけり

権大僧都心敬

遠しらふはくゝやうもとめあらん

釈教連歌

山ふはられ庵たてもなし

前大僧正尊通

よをいてはおのゝみちをやさとさん

こゝろ得ゆるすがたにおしえとの

前大僧正満意

たゝさくすいける二河のよひくす

一 みとせまつまの中に隔しさ

御製

むかしハ家ちれたるも雨をすみなりて
よのむかしん世清よひかしか
たつ姫山河の法安月は松かはの手
多るけなとの月う寂浄乃上法師
後京恩寺入道前関白太政大臣
わし松山康ひはその家のみちをひく
のりもかしや清さ紀ひれてら
宗柳法師
ふかしきるらりのかやこのそはたゝく

こころをしあはよの中はみち
贈従二位教証
佛ちかさ給はなし〜めしや誰
うく法よ人舎もたかひすてハきて
法橋萬哉
おこけもこゝ縁世の清くすらし
物うき野てゝのすしひハまれし
法下心教
たえたるをはゝとは法れひもなし

こゝ路ひとつ月そわくかたもなき
よみ人しらす
とまり寺はわか身さなからかけて
志らはあそよこゝろかゝりてそ
池河上人
いくかへりともかへきこころみのあれし
世きへは月をたつ路をもしる
宗砌法師
雨しふる霧にふかき比夜半の梅

うすしやなれん袖のうつり香
法印行助
ゆくすゑをおもふもかよ法花経さし
又くしてそ浦ことをもしほ
多言波弘訥師
乃ち花師八幡のかなしへやすらへん
津くへあそてさくら法ハさてひくら
前左大臣
みつはなみと浅きをそくいさき

おほとりてそつちはらまよふへきと云
句を法師品のこゝろを

宗祇法師

乃里のみつちり清く袖のちらひて
みちかかこそちかひむさし野のくさ
いつ句にたかしへを

肖柏法師

人ありてあはらりて清井をのりのしるへ
志清くてなかりこけれのこゝろをそて

宗般法師

はかりのふりきかへをはくとしきしくて
野山ありむまよふはしかきさ

緒正公助

うつて又このみやつ遊ありてくるらん
うつりひのあはれは清しとのおもひして

二品法親王尭澂

なかをりてはちのこゝろにと（ハ）こらん
むつのみちをハなれやかれくらん

前大納言公教

しまれきてふるけしきこそ人はみな
惑ひのみなと世をかけくらん

法橋尚存

うけかたき身をいたつらにすくしてそ
わか身をもたにはねのよこひの在

法眼紹永

いはゆきの色かなきよのやとを
ひとはなてるのこころつきさき

藤原文範

いくめくらりぬさらひよむまはらん
いつまてか旅の宿にはをしてまし

藤原縄正

めくりもとをてよこの世のちはよ
法まもるまよまくのみとて人法のうし

法しれよ 仏にもわかれぬ人そ
しこゑさとりよるに

宗砌法師

やまとかるむつきの月のわさやうまく
むかしより夢の車にほへこと
智蘊法師

ろうなミにてたつ浪の月をまつなる
いそなきたひのみなはにいり
源政長朝臣

いはくらは六つのちまたのかゝなくん
ふるむかしけもおもひしらすのま
神祇伯忠富

いる事もこゑしくるゝのゝこと
かりかねも鴈のこゑにまかれて
権大僧都心敬

ゆきまたむつのみちをもゆきまよひ
ふ縁てさらまし こゝろしもせは
宗砌法師

なき事かむつましきん六つのみち
月をあはれのとおりふたつかれ
宗長法師

しら露やひかりまつゆくむつきのみち
あらしのかせのはらふるるなり
法眼専順
たこなひかたしぬむきのこゑかなしくて
たちまちけふれともあきはよの中
大蔵卿経茂
はるはさかはなにあはれとのをと
ゆきのあしたをはかれはつるたに
多々良政弘朝臣

月は出てひとりおこなふ山のおく
みちはいくへふかきしの山のはてかな
宗祇法師
はるとりとほはおこなひ人のうしろて
たかくてまるすみゝのの袖
法橋兼載
永き日もつましくなるねおこなひは
すゑそある袖ふところをといはるゝ
前大僧正尊應

わからそ海乃いかりしへれあと
わすれてすゑをたのみぬやまみち
入道親王尊伝
大ひえやはるはかすみのしろき世よ
秋海てふや海渡おくらんかり
法眼専順
むかひゑや乃きはわかれし大般ふりて
夏山れは妙まよふ志るを人とひて
能阿法師

思ふことあらしもはやまかせにて
なけくこゝろのいるおく山まても
智蘊法師
しきみはむこのみは春の花をかし
をみをかゝみ日ころいつまゐる
宗砌法師
比叡山北ゆく人乃雲より寺見えて
佐野乃梅より山をはひしき
よみ人しらす

しほれぬるゝきりふかき縁なる梅もしら年

萬代の葉ふもゆく神のしるしの岩ねかな

宗光法師

まはよこのゆきかへるこそ道みち

ちるみちてもひとにはとはや谷の庵

法眼専順

みきは八月すむころそ峰にかゝる

新撰菟玖波集巻第十九

発句上

立春の発句子

前左大臣

はるも日はけさたつ春のひかりかな

名にそへひとり連歌志りしふ

法眼専順

花はたゝ霞ふそ霞とこ縁やよし野山

初春乃発句子

肖柏法師

花もはそ絶えしたる春のにきりかすみ

権大僧都心敬

花ハ見とかすかハおりふたるもなし

源勝元朝臣

雲よりもうつむやかすむ山もなし

多々良政弘朝臣

春霞ハ雪きえゆくかすむとる野かな

源政元

ゆきふあけ霞もくる宿ハうつりかな

宗祇法師

山はなほくれぬかすむやかこる小はの雲

権大僧都心敬

ちる花をみる小はかつ逢けきそ(ふ)ゆき

入道前右(左)大臣

ゆきこいまつかすみに消る深山かな

三品親王

うくひすやうけ初てなかぬ代々の友

家乃月なみの連歌に

前関白　[illegible]

世ハ治て梅にて知らぬ風もなし

梅比發句に

御製

梅の香そ繋てとゝまぬ春信かな

後三條太政大臣

さそふの緩結けるむめの小ひゝかな

小野北社にて有し連歌に

普廣院贈太政大臣

なを越にゝへ袖に志あ乃葉め乃たか

平貞宗朝臣

梅さけて松乃綾白ふるや井のれし

多々良政弘朝臣

花そ梅にほひハも多くきゝそなし

法橋兼載

ま津人のたちえやむすひ風と北梅

源桟親朝臣

むめかえのはなをいはふはしるかな
三品親王
世のかくる柳をみきハ緑をとめし
文明十九年正月廿五日百韻の連歌に
御製
うへしはのはなまつもこえし柳かな
後成恩寺入道前関白太政大臣
髪さへわかきはるにうちなふるやなきかな
宗長法師

かきやらは春のふは緑そふやなきまよふかな
あつまへ下りける人のもとへつかはしけ
るはし　時はまさるへきに柳を
宗砌法師
春風にもひとしふやなきかな
春の月を
小月梅法師
月はなくるゝかすみのひかりかな
こよひは
宗秋の梢もかすむ月のひかりかな

花をまつこと給を

法眼専順

備たうとてさりそれをまたまれくるか
家に人てまいらて百韻の連歌侍し

参議基綱

めつらしき人まつふたけさかりのひか

花を　御製

うれしまりさかに咲いて山もなし
花さかてこゝ後におもふ人もなし

三品親王

と絹をさ人よのまの雨れもけつ趣
よる人しらす
侍りて侍りと熊山よりやとるまこ人
右御宮に侍りて千句連歌侍かく
まゐりしに

権大僧都心敬

同法親花月小形へ浦河しかへるか
文正二年二月六日　源勝元朝臣奉之

此花にちりける千句のまへに
　慈照院入道贈太政大臣
わきてまつ春やかへるの山さくら
花は散句は此中に
　前大僧正尊応
花の時もてはやす草木ゝの部
　権大納言豊通
花は名のしめるは句ゝはさくらまて
　宗元法師

句はちてさくらくちる河したゝに
　法印行助
わか草にたつ日も霞そふ春に
　前大納言雅親
まちえてハ花にこゝろうつるらに
　法眼専順
花さくらおもへは似る雲もなし
津の国にくたりし時多の之路松翁
百韻の連歌志侍りしに

宗祇法師

ゆく雲にさそふやいつこさくら

　　宗砌法師

花さけハ雁もとゝまる雲路かな

　　源政長

花さそふ風と結たの絲は山路かな

　　能阿法師

ちるさくら人ハ旅なるこゝろかれ

和漢連句の発句ニ

　　前大納言雅親

雲ハ花かなたまよふ山のはさくらかな

花の発句抄

　　御製

こゝのへの都の山にいろ〳〵花の色も

前大僧正道興法親王世の詩も百韻の連歌侍りけり

　　慈照院入道贈太政大臣

ゆきかゝりけまや一本のうけ茂花の風と

花の発句ニ　宗京の房宗順

山や雨ちかけり庭にかすみかな

法眼専順

色やまつうつろふれ雲りや山はらく

宗砌法師

ちかけりろへおもふ夜月よみのけされ雲

花なけり月こそ後ちらしの木間かな

日影にしき花は中への後をかし

内裏にて千句乃連歌侍りしに

後成恩寺入道前関白太政大臣

かめかささうを清くきえん雲れなかな

花の後句よ

咲すそり咲花をみやこのかさしかな

御製

関白右（左）大臣

おらてみるかすみの袖のかさしかな

権大僧都心敬

ちるはこころふれ花のかさしかな

宗祇法師

ゆくこころ後たえずて無縁花をとかな

智蘊法師

花一本うへぬやこゝろやまもなし

宗砌法師

ちる花も時あるかなや桜かり

文明三年二月尽に一字露顕の歌に

慈照院入道贈太政大臣

花は木乃みかハ筆はなやしるか

花を

鈍阿法師

老木まてなかきこし花は山路かれ

後成恩寺入道前関白太政大臣

白毫院の花の下にての連歌に

山かりも後をハいそねさくらかな

落花乃発句に

ちらてハいさゝくらとや又はなし

文明十二年三月十日常徳院贈太政大臣

家にて人侍りし発句に

桜さや地にねたるをはおりもせん

法眼専順

あけハちるはなよりまさるねさめかな

法橋兼載

花そちるかゝらんとて此頃香なる

権大僧都心敬

我のふかんし花ゝ色なくて咲さかりて

ちる花ありあはうらみん風もなし

ゐよそ鶴むの書わねゆもかし

法眼専順

大原野乃花みよ満らし何百韻

連歌侍しよ

山はくてちるをあかしかのゝひもかし

山ゝの庵よそての連歌に

権大僧都心敬

ちる花に比雪さへ時雨き深山かな

落花之の発句よ

多くの政弘朝臣

ちる花やふま志てねは花のこす深かな

権大僧都心敬

色おちくをはてつ捨けきや満ちるかな

前大僧正道興

花うつるなかば川はてく本すゑかな

たちかへる波ハあかしを風かをれ

太政大臣

花よりふるはあはれとちらせ春の風

三品親王

春の發句の中に 小

花よりもみぬ山ふかれし物かみ春霞ふかき

權大納言心敬

内裏にてゆるし和漢連句の中に

前関白 冬良

むらさきや名にあふ庭の清水すみまさ

春の發句に

式部卿邦高親王

月を清めハ水際をゆくてのすみかかな

御製

風吹の夜へりを見もてかみあかるな

風まふ雲の八重に清くかのれあらうな

前大納言義運

さつきよりまきのこさね花をとるな

宗勲法師

待と散りたまひし事よたそ桜
暮春の心を

法印行助

花ハ春ゆりの人ゆのなそさくら

源政元

風ふかみハちるやとちらん心もな

智蘊法師

雲とみれの色ハあやなちれちる

宗伊法師

花ちりて風なくもえ散れわすかな

源友真

とめ山をあらやまみれハ庵のすゑ

校大洞云高清

くれゝ風も花にたわしぬやよひかな

御製

かくしつゝ年も暮りし三月のれ

夜の色れ発句に 後花園院御製

へてたまな散花ろめのきそのさかな

前大納言雅親
ちかそめとり色ハ緑もやなきの糸
千句の連歌に新樹を
御製
鳥やすむきりの葉しけき木すゑかな
花を見つゝひかみちをいそく葉かな
よみ人しらす
ありわか葉ハ緑こそ木すゑかな
夏の發句に
法眼専順
おくきなかをもちきる深山かな
智蘊法師
たかねえもかくなるそのゝ夏木たち
神益改
しけらぬハ花よりもたかし木ゝかな
権大僧都心敬
しけるまて梅の葉くちぬみやまかな
入道親王尊傳
この花の陰に袖ふしけさの月

後小松院御製
冬の夜の月にそまさる小はの雪
前中納言雅康
うき原にとわく月のひかりなれ
藤原長慶
うれしきをあらしに雪のしたふらむ
常徳院贈太政大臣かくれ給し年弥
随其名号の連歌に
従一位富子
なかしかる世をしのふ涙かな
春日比屋に後の千句に郭公を
源政元
いてゝとへ一聲はきくやほとゝきす
郭公の發句讀中に
権大僧都心敬
一聲はみやまのふかしほとゝきす
権大納言実隆
まちてこそきかんやなかなか我す

清輔

我ためになけ庭をまちけれはほとゝきす

入道前右大臣

雲につゝむ山のはすゑやてらしゆくらん

源尚純

かくる夜雨のいさよふ雲はるか

題志らす

法印行助

よなしたへなかへ山のはあけ在るなか

五月六日何路連歌に

宗砌法師

ほとゝきすあやめやかれし一声清ま

法眼専順

月かそしらつゝや志けりかくすらん

みのゝ国に下向し侍りいなかくれ山家に

わたりて志侍りし百韻の連歌に

後成恩寺入道前関白太政大臣

さみたれは山のはいかはりか

五月雨を

左衛門督為廣

さみだれハみつなまよろしのかさそてうか
三代集の作者とふちいまて侍し百
韻の連歌ニ　御製
五月雨ハ雲のわかぬ浪をかし
夏の連歌ニ　前左大臣　実
ふちなみハ梅よりうつるいろひらか
内裏にて和漢五句（朱：分）の發句（朱：百韻）ニ
権大納言實澄
五月まつ花の香ちらすみきりうか

前左大臣　実
夏草ハ雪居もとめしすゑ葉かれ
従一位冨子
下かアりにつゝねいけのたちすうか
智藴法師
小松おひ分てしこさけるいくかか
小野社ニ奉りし内裏千句の
連歌の中ニ　前左大臣
うしはなとく斗かなさく宮居うか

大染金剛院入道前関白太政大臣乃家尓而百
韻連歌尓　法眼専順
よるもくる月ハいつこのゆふすゝみ
納涼乃発句尓　玄澄法師
てりさへてみまハ志かりぬ志みつかな
宗祇法師
ふけてみぬひかりもすゝし夕月夜
宗砌法師
梅かゝる袖もなかれ行さすゝみ

法橋兼載
風はらひてすゝむ志け木は山路かな
多々良政弘朝臣
ふけやらぬ秋ちかき風かよふ旅北風

新撰菟玖波集巻第二十

発句下

秋のはしめの発句とて　太政大臣

霧たちてつゆをく秋のはしめかな

源政長朝臣

おしむ月秋をもかね一葉かな

法印行助

つゆならてちるはいろなき一葉かな

前関白政家

ちるとまて秋をしらぬ柳かな

会所は東にうけたまはりしこゝろさき

つかふまつりし連歌に　宗祇法師

地りをはなかきをはたゝるひと葉かな

七夕のこゝろを　太政大臣

河またりわたせはいかめはしき木かな

宗祥法師

石はやふしあくと聞なりせなか

権大僧都心敬

いかりきや七日ありし法河まて後も

閏七月の発句に宗祇法師

あふ秋ややこしふるの天津ほし

杉は発句の中小

法眼専順

ひらしけ忍ぶ月待ぬるか

源招法師

日くらしはゆふけまちぬ深山かな

法橋兼載

あしなかもたてやはおもし萩の露

慈照院入道贈太政大臣

梅北野は萩をしのぶまつりかな

文明十二年八月廿五日北野法楽連歌之

御製

梅も紀の花かやさて北の藤なる

・萩花を發句に　入道前左大臣

たかちるハいくほど花の下葉かな

源尚純

ゝ秋まして露におくまてよそにきりかな

智蘊法師

分もしらね小萩か花のゝは風かな

能阿法師

ゝはの坊乃ふきあけ白き花野かな

宗勲法師

まれ木をちくさにうつすも野かな

わきかうなくらうたるゝ身そゝし

連歌に　宗祇法師

ふりひきて玉ぬきもかゝりし梅か枝

枝の發句に　源政長朝臣

老し枝葉ハうつる孫小松か末の嵐かな

宗長法師

・吹風の秋や葛葉にも荻のしん忽

権大僧都心敬

柳ちりゝゝ○清滝川へなか

入道前右大臣

原なきて松の雲の尾上なか

肖柏法師

一こゑのすむやうなかく葉の月

前大納言雅親

月いてゝひろまこなゝゝゆきかくれ

権大僧都心敬

まいそて月の清みなかくゆへかな

後成恩寺入道前関白太政大臣

霧はれて月もゝのかるゆふへかな

文明二年八月十一日崇徳院御年忌の
千句に

慈照院入道贈太政大臣

すみのほる月のゆくへの雲もなし

法楽にをりましける時八月十五夜
の連歌に

後花園院御製

月は君のこゝろ度はなくみることなか

御製

月の名にと秋ハ似たる物そなし

太政大臣

清きよこよひひかりまさるのかゝみならん

八月十五夜前中納言定家の墓所にて

の連歌侍よ

宗祇法師

あけハ又いつくはこよひ誰の月

十五夜乃発句よ　法眼専順

月秋し世にも中の誰清寛

宗砌法師

月なやひかりこよひたちらの月もなし

多々良政弘朝臣

月ハあき誰ハとき月のひとよ秋なかな

法橋兼載

雲かくれも月ハかくてこよひかな

宗伊法師

写アりち法ひかりや月の誰の花

よみ人しらす

なかくにに月ハ出法深山かれ

此発句ハ九歳なりけるわらハのはへるに
まうてけるとなん
ありまふかきまゐりしを聞くましく
旅の連歌に　権大僧都心敬
月ハこゝ月にはさなくみやこかな
鶉しかハひさまの坂ふく浜風かな
志くるゝは比世まもりて
秋の坂ハりくへらハさらぬ比みやこかな
秋乃発句に　能阿法師
うし菊ふく梅の移しろきまつかな
宗砌法師
志本の菊ハゆふへを秋のこすゑかな
法眼専順
庭すゝしみつや菊咲く台のつゆ
智蘊法師
うつろふハきくにはしまる草木かな
よみ人しらす
おくりけさ雲井の秋のもみちかな

九月十日乃（百韻）連歌に　御製

むら里のこすきくいこてふ風さそふか

むかしく十三夜て

ふるき名をわするゝ月はこよひかな（二夜）

後小松院御製

こよひみな秋におしけし二八月もなし

文明十六年九月内裏月次和漢

聯句に　前関白　冬良

山と知し庭よりそめよ木々の色

梅花發句に　三品親王

梅花以縁を見やこふ婦女山もなし

御製

梅やこれ一葉花のちのころもみち

夕霧乃のまるは河く流木すゑうか

おかしきをわきてそ白あるもみちうか

慈照院入道贈太政大臣

ちるぬちくちこ葉に以縁なるかいてうか（作）

藤原政行朝臣

山ふかく猿には見へぬる秋かな

法印行助

七夕
おり姫の手にも渡さぬのみしきらか

法眼専順

くらしねかしきや月れしてこもみち

法眼紹永

梅か枝れこすゑやこけるらにしき

法眼専順

うすくこそ見えかみちやいつれもしくれ

蘊智法師

瀧の見にくれの井おちて林ともなし

玄宣法師

しくれをもかさしてぬるゝもみちかな

宗砌法師

そめのこそ月のかゝれ初しくれ

智蘊法師

長月や庭まゝ多れ風流をかしくれ

多々良政弘朝臣

なく鹿の声をいつかたとしれるか
律くにまかりし時　宗祇法師
枯ふけぬ松はしらこ乃おきつゝの色
九月に雪ふりける年　能阿法師
きのふまて梅見しころやこの雪は山
多々良政弘朝臣
雪ふる見えしとてや梅あきもなし
鶯枯はゝを　宗砌法師
梅はりみちたるゝつもて下もみち

前大僧正義運
ふりつもる梅に咲ぬまえもらぬ
遠に世はよのなかれ侍るあつまふ
下てはるふ海月ける　権大僧都心敬
雲にたれ秋あれ侍る世はしられるか
其後法えつき　宗祇法師
世はぬるとさしふ志る乃風もりか
法眼専順
夏木茂ふるみゆきすみ志られきり

権大僧都心敬

きくひとハ月をまつらむ志るしかな

忍誓法師

くはたとハわか見れ雪ふれ志るしかな

法眼専順

いつま山志くらゆきこれ嬉しかな

新世月の連歌ゟ　多々良政泓（弘）朝臣

梅ハ名残すきまのこゝろうき野かな

智蘊法師

新世月こそのかたる志ゝおちたゝかな

行助法師

白河のせきもりて

ちりしをハ古志ゝ花ちるまみちるかな

源政宣

こゝろしゝかなしはかれねもみちるかな

式部少輔高観王

本のちはちるまつにハ秋のちりさうかな

法制

かきみえて本のゆくかおちちるかな

よみ人しらず

神な月や海はしくれてふかぬ風もなし

法眼専順

露こほりてははたとふきちりけるか

道空法師

瀧ひたにゝはしらぬ松ひゆくしるか

宗祇法師

むらひく海山かけしあきのいと

宗伊法師

なかむれは川波志深きころ流るか

のみなせてよるし連歌に

後三條入道前左大臣

ありそりみつはすくなきことあるか

明応元年十二月廿五日於清連歌に

御製

月やけさわかまてもわするうすこほり

冬比發句に

慈照院入道贈太政大臣

ぬまきとめよにもるゝたまの花そりける

太政大臣

雪まてはまたかくれわく行かな
山やゆきふりぬ日はとる人やこそうかな

前左大臣　実

河としはくらす雪ふる所みきえるな

権大納言公敦

旅もなき河きあへは雪れゆふへうかな

権大納言兼日与

野戸あけて見渡るゆきれ夕うかな

宗祇法師

まみちまねかれもとるえしゆきれ松
こしよりふりし時
神無月はしかもしもて

宗長法師

見るとこやはもみちれ庭まこそ子れ雪
十月乃なか雪れたつらし時雨連歌よ

後知恩院入道前関白太政大臣

雪の歌よ
たつ雪はらすそれわ并れ夢ちうらか

御製

わか故梅かさくは雪乃こゝち(?)
太山ちの山としはされはさのゆき
雪をみハ梅法世とし庭乃(?)月
三品親王

名をもえぬ花そうゆきに法本すゑたまへ
小野山(?)も[朱：の社のまこよ色を]
善(?)庭院(?)前太政大臣

いつよりも小野ハゆきのふかしかな
内裏にて高麗和漢聯句[朱：まこ]
按大納言豊(?)

河さ霧よあゆきにまかみまかふかな
雪乃発句よ[朱：中]
源勝元朝臣

さらぬと地らハ雲乃小笛へ風もかな
法橋兼(?)栽(?)

名よう梅ひらハ雪の中乃月桜かな
従三位義(?)

月のけハ雪よりうへの二月かな
智蘊法師

月雪の猪(?)かつ見(?)ゆたかな

宗砌法師

ふりそとはやはもとれゆきのまは

藤原房定朝臣

こその雲ぢへつゝあらは雲居かな

多々良政弘朝臣

ゆきもふりつもらぬ山乃はるこそあれ

小月栖法師

かすみとみゆるやゆくへ雪のみね

法眼専順

さえすみに繪かける雪のゆふへかな

宗祥法師

にほはぬ袖にうつる雪の雲路かな

早梅を

法眼専順

冬ながらやさきそへて梅乃花

多々良政弘朝臣

よしやただ一花さける庭のむめ

前関白 兼清

まちまちてひらくは梅のこよひかな

観音寺入道前太政大臣

梅そはやくいろつくかハ野乃春

前右大臣

年のうちに咲ハこゝろか一木かな

歳暮の發句　太政大臣

世ハ春をまつみよしのゝ尾上かな

法印行助

志ら雪のひかりにまきれぬとしもかな

前大僧正増運

をしめなを春まてのちかきとしの暮

以前海増運両筆本校合畢
干時天明八年三月武陽城小
墨水邊於阪昌文法橋机下
矣

古屋春苑

新撰菟玖波集作者部類　次第不同

御製　百九句

後小松院御製　四句

後花園院御製　十二

後崇光院御製　六一

親王

三品親王　五十五

式部卿邦高親王　十九　伏見殿

三品法親王尭胤　五　梶井宮

入道親王道永　七　仁和寺宮

入道親王尊傳　五　青蓮院宮

覚胤法親王　又　妙法院宮

常法法親王　五　勧修寺宮

式部卿貞常親王　八　故伏見殿

大臣

前関白　廿六　近衛殿

太政大臣　廿六　一條殿

前右大臣　廿二　近衛殿関白御息

前左大臣　廿九　西園寺殿
前右大臣実　十六　徳大寺殿
入道前左大臣　十八　花山院殿
内大臣　三　二条殿如法寿院法息
後加恩寺入道前関白太政大臣　廿四　故一条殿
慈照院入道贈太政大臣　廿六　東山殿
大染金剛院入道前関白太政大臣　二　二条殿
後知足院入道関白太政大臣　二　近衛殿
妙花寺関白左大臣　七　後加恩寺法息

如法寿院前関白左大臣　二　金剛院法息
観音寺入道前太政大臣　二　西園寺殿
常徳院贈太政大臣　三　東山殿御息
後二条入道左大臣　九　後法輪殿
深草右大臣　六　大炊御門
後稱名院入道前内大臣　二　三条西殿父
十輪院入道前内大臣　十一　中院殿
慈玉院入道贈内大臣　一　庭田殿
納言已下　至殿上四位五位

前大納言親長　六　甘露寺
前大納言教秀　六　勧修寺
権大納言宣胤　十　中御門
権大納言宗綱　三　まつ木
権大納言澄宗　一　滋野井
権大納言豊通　六　久我殿
権大納言実澄　廿六　西殿
権大納言公房　三　西園寺殿御息
権大納言実香　二　転法輪殿御息

従一位澄登　故日野
従一位教忠　葉むろ
従一位雅行　四　庭田殿御息
前大納言雅親　十二　うはま木
権大納言教具　二　伊勢国司
前大納言季春　二　四辻
権大納言公澄　一　正親町
権大納言高清　九　海住山
前中納言永継　一　二る倉

兵部卿教國 三 道野井
大蔵卿經茂 六 勸修寺
前中納言緣光 四 武者小路
民部卿政為 冷泉持為息
右衛門督季經 二 四辻
左衛門督為廣 冷泉為富息
按察使俊量 四 あや小路
前中納言雅康 十一 飛鳥井
權中納言宣親 九 中山

權中納言政顯 一 勸修寺
多々良持世朝臣 六 故大内修理大夫
源勝元朝臣 二 号龍安寺
源政長朝臣 四 畠山左衛門督
藤原房定朝臣 二 上杉相模守
源政元 三 右京兆
源政春 五 本云湯川安房守
源政宣 七 同明智中務少輔
源尚純 九 関東新田治部大輔

源持知　九　小出豊前守
源元教　二　細川内
源盈郷　九　細川内波伯部
源則於　二　日能源右衛門
源寅陰　四　京極内小倉将監
源宣澂　三　関東桃井
源盤世　三　横手五郎
源経行　二　奥州南部
権中納言言国　三　山科

権中納言経卿　二　勧修寺
権中納言元長　二　甘露寺親長息
権中納言通世　三　中院十一将院息
参議基綱　十六　姉小路
神祇伯忠富　六　白川
参議重治　七　田向
参議基富　三　園宰相
左中将公連　二　洞院
従三位義敏　七　武衛

従二位明英　二　故半井

正三位敦卿　一　町

参議時影　二　西れとのん

従三位重長　一　丹波盤之長

贈従三位政弘　七　大内左京大夫

源重經朝臣　二　庭田

源政郷朝臣　五　伊勢國司

藤原基春朝臣　二　持明院

藤原雅俊朝臣　五　飛鳥井

菅原在数朝臣　二　唐橋

藤原基教朝臣　二　持明院

菅原和長朝臣　一　坊城

源材親朝臣　二　伊勢國司

源泰仲朝臣　三　故五辻

菅原為学　一　五辻條

藤原嗣廣　一　藤井

地下　四位已下

中原師富朝臣　二　大外記

菅原俊邑朝臣　　萬小路
多々良政弘朝臣　七十文　大内左京大夫
平貞宗朝臣　九　伊勢守
菅原政行朝臣　九　二階堂
源友興　十　赤松内有田
平助良　一　関東江戸伊勢守
平宗登　一　細川内茨川小四郎
平正教　二　典厩内瓦林
菅原光泰　三　千秋民部丞

菅原正能　二　典厩内池田帯刀
藤原正盛　四　同内やうこ此すけ
菅原正種　二　細川内池田美濃守
菅原正存　二　大内々門司兵助
菅原能秀　五　畠山内松浦孫九郎
菅原武貞　二　大内々門司右馬尉
菅原元親　四　細川内伊丹兵庫
藤原憲猶　二　上杉内市川和泉守
藤原文郁　三　伊勢国司内朴木刑部丞

小右原北之陣分 一

藤原京豊 二 細川内伊連

藤原為續 九 肥後國右衛門尉

藤原利纓 三 斯波内斎藤弾正忠

紀光信 九 細川内細見河内守

紀則宗 三 京極内浦上民部

説弥友弘 二 日吉樹下

惟宗氏弘 三 畠山内神保能登

大江重廣 二 上杉内毛利越中

大中臣時就 一

小野業盤 二 梅渓伝法

丹治氏春 三 関東奉公安保

荒木田守武 一 内宮禰宜

荒木田守晨 一 同

柏久時 一 右筆人対馬

源秀満 三 細川内堀川孝家

平長恒 二 松原安藝

平章棟 三 伊勢國司平兵庫

菅原之親　一　細川内伊丹
藤原長滋　二　畠山内播信加々守
藤原経正　二　細川内池田民部丞
藤原寿正　一　畠山経正父
菅原光清　二　武衛内堀江七郎
菅原推久　二　同堀江中務
菅原臨蔵　五　大明
宮原親慶　一　赤松内周防守
宮道親元　　　同新右衛門尉

神益政　三　細川内物部
小野国盛　三　新田内桂備後守
早忠悦　一　山名内太田垣能登守
従一位冨子　女房　十四句　上様
前左大臣女　四　西園寺
勾当内侍　三　長橋
前大僧正道興　僧　八　聖護院

前大僧正満意　同
僧正公助　三　宝池寺
権僧正日遍　三　妙蓮寺
権僧正祐斎　一　青蓮院出世
前大僧正尊道　二　円満院
前大僧正義運　八　実相院
前大僧正増恩　六　実相院
法印公意　二
大僧都慈運　三　竹内新門主

他阿上人　四　遊行
玄道上人　一　霊山
邦諫上人　一
法印等海　一　真光院
法印玄津　二
法印心教　大原大深院
法印宝鑑　一　竹田
権大僧都超実　一
権大僧都秀順　三　天王寺

權律師 眞宗　二　一音院

權律師澄澈　三　古市

法印泰温　一　故青蓮院宮

法印宗範　一　山従

法印行助　廿四　惣持坊

權大僧都心敬　百廿三　十住心院

權大僧都智句　十一　本能寺

法印好椿　二　持是院

法眼紹永　十　實德圓

法眼泰英　一　同

法眼泰友　一　青蓮院坊官

法眼泰德　五　同

法眼性膺　一

法橋兼載　五十二

法橋堯珎　四　青蓮院与利

法眼専順　百八　六角堂法師

法橋宗存　九　専順子

法眼禅豫　三　小野松梅院

肖柏法師　廿一　久我夏居

宗順法師 三 日野東洞院

道空法師 十六 慈雲院

玄澄法師 六 上松瀬路

玄宣法師 十五 東山明智

壽友法師 七 小槻長興宿祢

宗祇法師 廿九 種玉院

清超法師 三 東寺雲院

兼阿法師 二 時宗

其阿法師 三 同

宗切法師 三 武田内寺井

宗仲法師 一 祇円宿

存徹法師 上杉内長尾〻河守

正任法師 三 大内〻お宮

宗竺法師 二 東条〻使守

宗光法師 二

宗悉法師 三 門目屋九清門

恵俊法師 二

宗勲法師 十二 故武田

宗砌法師　百十四　山名内
忍誓法師　十二
宗伊法師　卌六　松原伊賀守
智蘊法師　卅六　伊勢守内
能阿法師　卌二　公方同朋
藝阿法師　二　能阿子
一笑法師　二　時宗
道真法師　二　上杉内太田備中守
宗雄法師　二　細川内臨常日向

宗元法師　四　小笠原美濃守
日最法師　四　伊勢國司内安乃
源意法師　一　山名内金澤下野
禅盛法師　二　三井越前
愛益丸　二　青蓮院兒
藤原正時　一　東彦左衛門尉
九歳童　一　丹波阿入道
滋久　一　石井孫三郎
宗友　七　泉州堺住

正孝法師　一　山本猿周
橋也叙　五
寅中法師　二　蒙橘庵
慶卜法師　二　奥州住
宗悦法師　二　越中住人
宗循法師　二　越後住人
宗怡法師　一　兼載同前

法製、
三品釈玉

心敬　六　宗砌　六
宗祇　二　専順　二
肖柏　一　宗長　一
兼載　一

寛保三年癸亥初春吉日
長谷川庄右衛　梓

5年5月

寛政九丁巳年閏七月書冩

副元

寛政九丁巳年閏七月書寫

副元